
虹の彼方へ

櫻井真樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虹の彼方へ

【Nコード】

N4968G

【作者名】

櫻井真樹

【あらすじ】

過去に囚われて、人を愛せない真菜。1人が怖い領汰。人を信じられない准。深い闇を抱えた羅希。悲しい優しさを持った優希。全てを背負い込んでいる笑樹。それぞれ心に傷を持った男女が、繋がり糸を一つ一つ見つけていく、青春ストーリー。

始まりは、唐突に。

今日からまた、違う種の人たちと出逢うんだろう。

あれから4年。

癒えたと思っていた傷は、まだ癒えていなかった。
幾度となく転校を繰り返しても、何も変わらない。

行きたくない場所。

でも、行かなければまた沢山の人が寄ってくる。

どうして？ 大丈夫？ と。

でもあと1年だから。あと1年で、自由になれるんだ。

自分で働きに出て、もう、1人で生きるんだ。そう決めている。

中学を出てすぐにでも働こうと思っていたが、高校だけは出ると、
周囲に言われ、今に至る。

やっぱり、行きたくない。

人に逢いたくない。自分の感情が怖いんだ…。

そんなことを考えていると、登校時刻はとつくに過ぎていた。
このままサボろうかと思った。でも、余計な心配はされたくない。
というより、余計な言葉をかけられたくない。
だから、行くことにした。

通常だと、2時間目の最中だろうか。
もう、そんなことすら覚えてない。

「ふふ、ゝゝ。病んでるな、あたし。」

自覚できるかな？
そう思って、わざと言葉に出してみた。

季節は、春だ。
高校3年生。なりたて。
それが、あたしの肩書き。それだけ。

学校に着くと、外で体育をやっている先生が、不審そうにこっちを
見てきた。

でも、そんな目は気にしない。気にしてたら、もうとっくに、死んでる。

新しい制服で、新しいカバンで。
キレイなものは、溢れてる。
なのに、どうして学校は汚いのか…。

教室の前に着くと、入る前に小さな声で、

「もう逃げ出すな。」

と、そうつぶやいて教室に入った。

ガラガラガラッ——。

わざと音を立ててみた。
自分の存在を試すように。

やはり、周りがざわつく。
そんな中、教壇の上に立っていた人が、

「おおー、篠本。転入初日から遅刻かー。うん、たいした度胸だ。」
「すいませんでした、ちよつと用があつて。」

特に何もないけど、なんとなく。

「家に隕石でも落ちてきたか？」

クラスが笑つてゐる。何が面白いのか分からないけど。

「ん、つ、とにかく、みんな、今日からこの学校に転入することになった、

篠本真菜さんだ。あと1年だが、仲良くしてやれよ！」

クラスのいたるところから、「はい」、「うっす」などの声が。別に、仲良くしてほしいなんて言っていないのに。

「篠本、一言。」

「えっ……。あつ、はい。」

正直、困る。でも、言わなきゃいけないから。

「篠本、真菜です。よろしくお願いします。」

だけ。いつものことだ。

「じゃあ、篠本の席は、ゝゝ。宮川、手をあげてくれ！」

「・・・俺つか？」

「宮川はお前だけだろう。」
「・・・」

窓側の男が、手を上げた。

「篠本の席は、あいつの前だ。さあ、授業を再開するぞ。」

席につくと、周りの何名かが話しかけてくる。
でも、全部無視。嫌われたっていい。好かれるよりマシだから。

手を上げたのがあの男だったこと、
この学校に転入してきたこと。
すべてが運命だったんだ、そんな気がする。

運命的な出逢い

退屈、退屈、退屈。全てがそうだ。

人との関わりを仕方がないと、頭は分かっているけど、体は分かってくれない。

自然と、足は屋上に向かっていった。

開いてないんだろう。そしたら、合鍵とか、そういうことも考えなきゃいけないな。

これから、きつと。ここへ通わない日はないと思うから。

ガチャツツ——。

開いてる…。

誰がいるの？

外へ出て、辺りを見てみると、男が近づいて来た。

「何年生？」

今、同じ空間を共有しなければいけない人とは、怪しまれない程度に会話は行すべきだ、と、そう思っている。

「3年、です。」

「じゃあ、転入生だ。」

「...。そうですけど。」

「おっ、当たり前！？オレすげえ！！！」

1人でうひゃうひゃいつてる。なんだ？この人。

「なにか、用ですか？」

「んーん。別に。ただ、授業中にここへ来る女の子っていないから、珍しーなーって

思ってたね。それだけだよ。」

「...。そうですか。」

「んー、そう。じゃあ、授業戻るから！！あつ、オレ長瀬領汰！！またねー！！！」

あの人は何なんだ？

長瀬領汰と名乗る男は、嵐のように去っていった。

高い場所は気持ちが良い。

全てを見下せる。

いつそのまま落ちようかな...

そんなことを考えながら、真下を見る。

特別、怖いわけではない。

このまま落ちることに、恐怖などなにもない。

ただ、これでいいのかな？って。

思うことは、それだけだ。

「ねえ、ちよつ！！！なにしてんの！！」

どつかで聞いた声が聞こえて、その次の瞬間には、誰かに引っ張られてた。

「ちよつと！！なにしてんの！！ビックリしたじゃん！！」

「ああ、さっきの…。」

長瀬領汰だ。

「死にたいの？」

「別に…。どうなってもよかったから。」

「んなこと言っちゃだめ！！ねえ、簡単に死ぬとか、だめなんだよ？」

この人が言う言葉は、一つ一つ突き刺さる。

言われて嫌な言葉、でも、一番かけてほしい言葉を、知っているみたいに。

「なんでよ！！沢山いるじゃない！！興味半分でとか、それに、死にたくないのに、死んじゃう人だっている！！」

「キミは、その中に入りたいの？」

違う。死にたいわけじゃない。ただ、生きてることが辛くて…。

「……。」

「違うんでしょ？ 生きたいって、どっかでは思ってるんでしょ？ だったら、今を生きたれない人のために、一生懸命に生きて、それで死ぬんだったら、死ねば、いいと思うな。」

「あの…。」

「なに？」

「手、離してください。」

「あつ、ゴメン！ でも、もう死ぬなんて考えちゃだめだよ？」

繋がっていた手を、ゆっくりと離しながら、また説得に入る。

「…死にたいわけじゃないんです…。ただ、どうしていいか分からないだけなんで…。」

「なら、なおさら生きろ。それが明日に向かう方法だよ。じゃあ、ね。」

また帰っていった。

領汰 Side

「んー、そう。じゃあ、授業戻るから！！ あつ、オレ長瀬領汰！！ またねー！！」

俺がさよならして、前を向くときのほんの一瞬。

彼女はすべてを見透かしたような、悲しい目をしたんだ。

なんか心配で、引っかって。

初対面の人なのにね。初めてだよ、こんなこと。

そのまま帰ろうと思ったけど、どうしても心配で。

彼女が、何かするんじゃないかって。

もう、逢えなくなるんじゃないかって。

きつと、どっかで惹かれてたんだ。

気がつけば、屋上へ向かって再び走り出していた。

.....

はじめてだよ。

死ぬな！って言うてくれた人。

生まれて初めて、「私、生きてていいんだ。」そう思った。

嵐の前の静けさ

相変わらず、教室では何人かの生徒が話しかけてくる。
いい加減に分からないのかと、呆れるくらいだ。
もう、この思いを抱くのも何日目だろ…。

「失礼します。」

呆れるほど飛び交っていた声が、一瞬にしてやんだ。

でも、叫び声や、悲鳴のようなものに変わり、女子が騒ぎ始めた。

「よお、春日井!! どうした?」

「あつ、篠本真菜さんって、いますか?」

「篠本なら、宮川の前の子だ。」

「ありがとうございます。」

篠本、ああ。私か。

「篠本さん？」

「私、ですか？」

「うん、そう。ちょっと、一緒に来てもらえる？」

「・・・はい...。」

「笑くん!!」

後ろで声がした。どうかで聞いたことある。

「准!! 准も来る?」

「あ、や、いいよ。」

「そつ。じゃあ、またあとで。篠本さん、一緒に来て。」

呼ばれたぶんは、なんとなくついていってみる。

「あの...。」

「ん？」

「なにか、用なんですか？」

「うん。生徒会室まで。」

生徒会室は、確か上の階。

彼の後姿は、なんでも背負ってる感じがする。

「えっと、転入してきてすぐだから、いろいろ分からないことがあると思うけど、

とりあえず、これを読んでおいてくれれば。」

学校のマニュアル本見たいなものだ。

「はい…。」

「やっぱり。」

「は？」

突然に言われた。

とっさに返せる言葉なんて、限られているから。

「いや、長瀬領汰って、知ってる?。」

長瀬領汰…。ああ、あの屋上の。
暫く会っていなかったが、私の記憶に間違いはないと思う。

「知って、ます。」

「アイツに聞いたんだ。篠本さんのこと。まあ、アイツは篠本さんの名前、知らなかったけど。新しい転入生って聞いて、篠本さんに会って見たら、
すぐに分かったんだ。アイツの言ってることが。」

「そうですか…。」

「なんか、ゴメンね？
だからなに？って思うよね。どーでもいい人の話聞いてたって。」

「いえ、別に…。」

「いいよ。そんな敬語使わなくて。どうせタメでしょ。
オレ、春日井笑樹。一応、この学校の生徒会長。よろしく。」

この人の笑顔には、裏なんてなにもない。
本当に私の心は闇なんだと、よく分かるくらいの明るさだ。

「ああ、はい…。」

「じゃあ、引き止めてごめんね？困ったことがあったら何でも言うて。またね。」

.....

春日井笑樹。

私の憧れが、こんなにも近くにいた。

心の底から笑えて、人を気遣える。

そういえば、長瀬領汰も、そうだったな…。

異変

新しいことが起きた。

まあ、どちらかといえば良くないこと。

学校に来ても、机がない。

・ ・ ・ ベランダだ。

物が無くなる。

・ ・ ・ 盗られてる。

人の視線を感じる。

・ ・ ・ ざっといつもの倍くらい。

いじめ、か。

独りには、もう慣れた。

いままでもそうだったから…。

そして、これから…。

美術室。

安全な、気がする。ここにいれば。

確かに、ここは安全だ。

1日、過ごしてそう思った。

美術室は2つあるから、授業で使う心配はまったくない。
だから、いつまでいても構わない。
そして、誰もいない。

次の日、学校に来て、朝のHRだけ聞いて、また美術室に向かった。

でも、今日は違う。

誰か、いる…。

体格的に、男だ。

後ろを向いて、絵を描いてるみたい。
このまま、気付かれないうちに帰ろう。

「ねえ！！！」
」

びっくりして振り返った。

「キミ、昨日もいたよね。」
」

気付いて、たんだ…。

「絵、好き？」

「・・・・・・・・」

「じゃ、授業サボるわけないか…。ねっ。」

「・・・・・・・・」

変わらず、ふわつとした顔で話しかけてくる。

「まあ、取りあえず中入りだよ。……逃げてきたんでしょ…。」

「えっ…。」

「やっと喋った。ほら、入りだよ。」

悪そうじゃない。
入って、みるか…。

「ここが安全ね、美術室。よく考えた。と思う。」

「あの…。」

「ん？」

「何で、分かったんですか。その…。」

「逃げてきたかって？」

「……………」

「顔に、書いてあるから。かな。」

「えっ？」

「ふっ、ウソだよ。キミ、結構有名だよ？・・・春日井笑樹を落とそうとして、近づいたって。」

「春日井、笑樹・・・」

生徒会長・・・。

「知ってるの？」

「はい・・・。」

「じゃあ、事実かぁ。そんなことするようには見えないけどなぁ。」
「ち、違います。大体、話しかけてきたの、春日井さんですし。」

喋っていることは深刻なはず、なのに、この部屋の中にはほわっ、
っとした空気が流れている。

「ふふ。やっぱ。そっかそっか。そうだろうね。」

「……。お友達、何ですか？」

「ん、まあね。」

「そうですか……。」

「気になる？笑くんのこと。」

「い、いえ……。」

「そっか……。オイラは、キミのこと、気になるな。もっと
知りたいって、そう思う。」

「……えっ……。」

「なんか、ゴメンね。でも、ものすごく気になってる。
じゃなきゃ、初対面でこんなに話すことなんてないから。」

この人になら、本音を明かしてもいい気がした。

「……春日井さん。探してた人でした。」

「えっ？生き別れの兄妹とか？」

「そう言う意味じゃなくて。」

憧れだったんです。心の底から笑えて、人のことを気遣える人。
ずっと、自分のことを見てきたから。他の人なんて見てなくて。」

「そ、なんだ。大変だったんだね。まあ、ここ。好きに使ってよ。
「えっ、いいんですか？」

「うん。まあ、オイラの部屋じゃないけど、ここオイラ以外誰も使
ってないし。オイラ、別にキミのこといじめるつもりないし。」

「ありがとうございます。」

「ただ…。条件。」

「はい？」

「敬語。」

「が？」

「やめてよ。距離感しかわかない。」

「わか、った。」

「それと、名前。教えてよ。オイラ、黒田優希。」

「真菜。」

「上は？」

「篠本…。」

「真菜ちゃん、か。分かった。じゃ、オイラ帰るわ。またね。」

「うん、また…。」

「ふふ。笑った。バイバイ。」

笑、えた…。

あたし、笑えた、よね…。

黒田優希…。

あたし、変わるかも…。

光と闇

また、来た。

彼なら、大丈夫だ。

信じて、いいかな…？

あたし、変わるかな…？

ガラガラッ——

「黒田さんならいせんよ。」

誰？

背の低い…。

っていうか、少し背中が曲がってる…。

「もしかして、彼女さんとか。」

「ち、違う…。」

「ふーん。まあ、どっちにしても。可愛いね。入りなよ。」

半ば強引に美術室内に引つ張られた。

「は、離してください!!」

「ヤダ、って言ったら?んふ。」

最悪だ…。

「昨日もいたよね。黒田さん、カッコいい?」

「違う!!」

「オレのになってよ。篠本さん。」

「なっ…!!」

両腕をつかまれて、壁に押された。

小さな体のどこにこんな力があるんだろう。

「や、やめて！！！」

「うっせーな。」

「オレの連れになにしてんの？」

力が緩んだ。

その隙に、声の方へ走った。

「リーダー。来ちゃったか…。」

「来ちゃったか、じゃないよ。」

「あっ、もしかして、彼女だったり？」

「違うけど。」

「じゃあ、、、」

「でも、嫌がってたじゃん。オイラ、友達いじめられるの、嫌なん

「なにになに？なんかあったの？あつ、屋上の子！！久しぶり！！」

長瀬領汰だ。この人も、こいつと、仲がいいの・・・？
なんで？こんなやつと・・・。

「長瀬さん、知り合い？」

「うん。ちよつとだけね。なんかあったの？」

「この子、オレのにしようと思ってね。い・感じのところで黒田さん
に見つかっちゃった。」

「はあ？それはダメだよ。」

「長瀬さんも・・・。」

「羅希さあ、その遊び癖いい加減に直しなよ。普通にしていりゃあい
いんだからさ。」

「だから、リーダーに言われると何も出来なくなるから。」

「じゃあ、もうしない？」

「んふ。分かんない。（妖笑）」

「もう・・・。」

ガラガラッ――

「悪い悪い。准探してたら遅くなっちゃって。」

「おおーいいよ。オイラっちも今来たところ。」

「オレ、30分以上待ってたけど？」

「それは羅希が授業サボってるからだろ。」

春日井笑樹……。

宮川……。

なんで？

なんで、普通に喋ってんの？

この人、さっきまで最低なことしてたんだよ・・・？
ありえない・・・。

駆け出していた。

「真菜ちゃん!!!!!!!!!!!!!!」

誰の声も無視して。

闇の中って

走った。

向かった場所は、自分の家。

そこにしか、帰る場所はないから。

信じた、自分がバカだった。

何回も悔やんだ。

何回も、何回も。

いつの間にか、眠りについてしまった。

気が付くと、陽は傾いていた。

「お腹すいた……。」

学校を飛び出したのはお昼前。

でも今は、夕方。

冷蔵庫には、何も入ってない。

自分で、買いに行く。

「よしっ……。」

財布だけを持った。

ケータイは、いない。
持ってるけど。

誰からも、連絡なんてないから。

「やっと出てきた。」

玄関のドアを開けた瞬間、声の主と目が合った。

「なっ……。」

あの、最悪なヤツだ……。

反射的に、ドアを閉めようとした。

でも、向こうの方が早くて、外に引きずり出された。

「逃げないでよ。別に、襲わないよ?」

「やめて。離してよ。」

「オレ、すつごく嫌われてるみたいですね。」

なに考えてるかわからない。
すつごくムカツク。

「当たり前。なにしたか、もう忘れたわけ?」

「なにしたっけ・・・? 忘れたかも。」

「ありえない・・・。」

つかまれてた手を振り解いて、歩き出した。

「可愛い。」

あいつが、そうつぶやいたのも知らずに。

気付かなかった。

スーパーの中に入って、自動ドアに映った姿を見るまで。
あいつ、ついて来てる。

「なんでついてくんの。」

「どこ行こうが、俺の勝手でしょ。」

「はぁ……。」

「今日の夕飯は何ですか？」

「あんたには関係ない。」

「関係ある。だって、真菜っちで食べるもん。オレ。」

「はっ？」

「んふ。よろしくどうぞ。」

「……消えて？」

「うわ……。さすがの、なるちゃんも傷付いちゃうよ？」

「知らないよ。そんなの。」

「んふ。んなことばっか言ってる、襲うよ？」

手をつかまれたけど、何故か反抗出来なかった…。

今までの、なんとなく見透かしたような目とは違う、
すべてを引きずり込む、闇の中みたいな目をしてる。

「あたしを、、どうしたいワケ？」

「オレのものにしたい。」

「なんであたし？」

「いい目をしてる。」

「それだけ。」

「目は、結構重要ですよ。」

「何であたしの名前知ってる。」

「なんででしょうね。さっ、お買い物しましょ。オレ、ハンバーグがいいなあ。」

「・・・分かった。」

「えっ・・・。」

まさか、な答えだったんだろう。口が丸くあいてる。

「なによ。」

「えっ、いいの？」

「特別...。」

あんな目されたら、断れないよ...。
そんなこと、口が裂けても言えないけど...

それに、同じ目をしてる人、どっかで見た気がする…。
春日井さん…？ 長瀬、領汰…？ 違う…。誰だろ…。

「オレといるとき。」

「へっ？」

「オレといるとき、他のヤツのこと、考えんなよ。」

「彼女じゃない。」

「それでも。」

「分かった。」

「真菜ってさ、多重人格？」

「まさか。そんな面倒くさいことしてらんない。なんでよ。」

「だって。黒田さんとか、笑ちゃんと話してるとき。それと、オレと話してるときと、ぜんぜん態度違いますよ？オレと話してるほうが、幾分自然な感じ？」

確かに…。

「あんだというと、、なんか…、不思議。普通にされてる。」
「ふーん。じゃあ、ホントの真菜って、少し気の強い子なんだ。ん
ふふ。」

「でも、なんで知ってるの？春日井さんたちとの接し方の違い。」
「だって、ずっと見てたもん。屋上も、生徒会室も、美術室も。」
「うわっ。やっぱ、あなたって最低。」

「なんでよ。たまたまだって。」

「絶対ウソだ。ふふ。」

「んふふ。」

「あれ？羅希？」

「あつ、准くん。」

「この子って、さっきの子じゃん。」

「あつ、オレの彼女。篠本真菜。」

「違います。彼女じゃないです。」

「もー。照れちゃって。」

「照れてないし、彼女じゃないし。」

「羅希は、気をつけてね？オレ宮川准。よろしく。」

あの中にいた人なら、大丈夫だよ。
心のあたしが、そうつぶやく。

「篠本真菜です。朝も、会いました？」

「転入生の子だよね？」

「あれ？顔見知り？」

「オレの席の後ろ。サボリ気味だけど。」

「あつ、すみません…。」

「じゃあ、オレ行くね。羅希にはホントに気をつけてね。」

初めてしつかり喋った。

意外と、好印象。

教室とは、全然違うし。

「ねえ、そういえばなんだけど。」

「なに？」

「あたし、あんたの名前知らない。」

「おお、これはこれは。申し遅れた。ワタクシ、成宮羅希と申します。どぞよろしく。」

「じゃあ、成宮。」

「ええ。」

「なによ。」

「真菜の子分か。違いよ。」

「じゃあ、なる？」

「いやあ、名前で呼んでよ。女の子には名前で呼ばれたいし、真菜だって将来は、、成宮かもしれないし？」

「ああ、それだけは絶対無いから。安心して。」

「なんだよ。夢がねえな。」

「あんたの結婚相手は、一生いないと思う。」

「ひどー！！傷付いちゃうよ？床に“の”の字書いちゃうよ？」

「知らない。早く行くよ。ハンバーグ食べるんでしょ？」

「ねえ、で、名前は？」

「わかった、名前で呼べばいいんでしょ。行くよ、羅希。」

「んふふ。可愛い。」

「あつ、もう呼んであげないー！！」

「いやいや……。嬉しいよ。なんて呼ばれても。オレの前だと、素直になってくれたりさ、名前呼んでくれたり。他のやつらにはしてないんだって思うと、嬉しい。」

「別に…。特別、って訳じゃないし…。」

「強がんなって。」

「だって、羅希の所為でみんなに嫌われたらどうすんのよ。」

「みんなって、笑ちゃんとか、長瀬さんとか？」

「そうだけど。今日だって、いきなり出会って、黒田さんに見られちゃったし…。」

にまにました顔でこっちを見てくる。また、いつもの顔に戻ってる。

「大丈夫だって。心配ない。」

「なんでよ。」

「彼らは、そんなことで人を嫌いになる人じゃないですし。むしろ、ありのままを見せてくれたほうが嬉しいんじゃないですか？」

「そう、なんだ。分かった。帰ろっ!？」

「おっ。」

.....

「おいしかった。ありがとう。」

「いえいえ。」

「あつ、もうちょい今の発言大切にしてよ。なるちゃんがここまで素直なの、久々なんですから。」

美術室の面影なんて、どこにもない。

優しい成宮羅希。

罵ってゴメン、と心の中で謝ってみる。

「じゃあ、帰るわ。」

「ホント、なにしに来たの？」

「仲良くなりたかった。今日あんな状態で帰っちゃったから。」

「じゃあ、目的は達成と。」

「Yes。」

「じゃあ。バイバイ。」

「オレ、真菜のこと守ってあげます。」

そういつて、くれた一枚の紙切れ。

「ん。ありがと。また明日ね!!」
「絶対来いよ!!」
「サボリ魔に言われたくない!!」
「んふ。じゃあね。」

紙切れに規則正しく並んだ、英語と数字。
照れたんだろ。な。あの性格じゃ。

・
・

真菜です。

ありがとう。

・
・

I Believe

朝。

いつもと同じ景色が、数倍輝いていて、人を信じるって、いいなあって。

今まで閉じ込めてきた感情が、溢れてきて。

悲しくないけど、自然と流れてきた涙。

悲しくない涙なんて、何年ぶりだろう…。

- ピンポン -

チャイムが鳴った。

ただいま7時30分。

「誰だろ…。」

ガチャ
――

「ら、羅希？」

「・・・遅い。」

「遅いって、まだ早いでしょ？」

「オレ、ずっと待ってましたけど？」

「えっ？」

確かに、羅希の顔を見ると、少しだけ眠そう。
ホントに、待っててくれたのかな・・・？

「ホントに、待ってたの？」

「待ってましたけど？」

「・・・ありがとう。」

「へへっ・・・、別に。」

ちょっと照れくさそうな顔をしながら、キミが言う。
ホントに、照れ屋なんだなあ、って。

「ちょっと待ってて。支度してくる！」

「わかった。」

羅希がいるって分かってるから、ゆっくりはできない。
ささっと支度をして、家を出た。

「よし、行きますよ。」

「はい。」

「真菜」

「ん？」

「何で、さっき泣いてたんです？」

「えっ・・・？」

泣いてるところは、見られてないはず・・・
何で、知ってるの・・・？

「何でもお見通しなんです、なるちゃんには。」

「そっか…。でも・・・ひみつです。」

「・・・わかりました。じゃ、急ぎましょ。遅刻です。」

深入りしてこない。
きつと、それがいいところなんだろう。なって。

「羅希ー!!」

「あつ、准くん。」

「おはよ、羅希、真菜ちゃん。」

「お、おはようございます。」

「何で堅くなってるのよ、あなたは。」

「い、いや、別に。」

「いーよ。確実にタメなんだから。“じゅん”で。」

「いやー。せめて、准くん？」

「（笑）わかった。」

「じゃ、行こう、准くん。」

気付かなかったけど、隣でどんよりとした空気発見。
マンガ的には、紫っぽい空気が。

「羅希ー??どうしたのよ。」

「ふんっ、別に。さっさと行くぞ。もう。」

「拗ねちゃって…。ほらあ、行くよ。」

信じられる人がいるこの空間が、あたしは大好き。
羅希に、准くん。心強いんだなあ、これ。
なにかあっても、大丈夫。
あたしは、変わった。

I Believe . . .

曇りのち晴れ、または暴風雨

あたしが誰と話そうと、そんなこと周りには関係なくって。

いじめの雨はやみそうにない。

今朝は、准くんが一緒だから平気だった。けど、こんな場所にはいたくない。

春日井さん、何も関係ないのに。

私の居場所なんて、どこにもないのかもしれない。

ふっ、と、あの顔が浮かんで、足はその場所へと向かっていた。

「あれ？」

もう聞きなれた声。安心する裏のない笑顔。すべてに心惹かれていく。

「また、来ちゃいました。」

自然と、笑顔になって、心開かれて。

この5人なら大丈夫だと。

「来てくれたんだ。うれしい。」

長瀬さん、幸せなんだろうなあ。って。

「お久しぶりです、って言っても、会うのは昨日振りですよ。」

「でも、ここで会うのは久しぶりだよ。まあ、細かいことは気にしないです。」

笑いあえるこの空間が、幸せなんだろうなあ、って。

「真菜ちゃん、だよな？名前。」

「あつ、はい。相崎真菜です。」

「昨日大丈夫だった？その…。」

言いづらそうに話を切り出す。

「成宮さん、ですか？」

ビックリしている。

まさか、その名前が出てくるとは思わなかったのだろう。

「羅希とき、仲良くなれた？」

いつもはとびきりPeaceの顔が、曇ってる。

きつと、心配してくれたんだ。

「なれました。しっかり喋ったら、いい人でしたし。」

また晴れてきた。

「そう、よかったあ。・・・あのさあ、敬語やめよ？」

「はい・・・？」

「俺の名前、覚えてる？」

突然のことに困っているあたしの顔を覗き込むようにして、話を続ける。

「長瀬さん、ですよね。」

「ほらあ。“さん”付けとかナシ。領汰でいいって。」

「え…。でも…。」

長瀬さんの目がキラキラしてて。これはとても断れる雰囲気じゃないなあ…。

「じゃあ、“くん”付けって言うのは…」

「んー、まあ、それでもいいつか。好きに呼んで？でも、“さん”付けはナシだから。」

へへへ、と笑って、あたしに同意を求めてくる。

「敬語も…、ダメ…？」

「もち…！」

やっぱりキラキラ…。断れない…。

「分かった…。領くん…。」

自分の顔が、ものすごい赤くなってるのが分かる。

「照れるけど、うれしいなあ…。」

「……………それよりさあ…、」

笑った顔が、少しだけ真面目になった。

「どうして、屋上来たの？」

その質問かあ…。

そういえば、まだ知らないんだよね、領くん。

“イジメ”って、事実。

My Dreams

「教室ね、つまんないの…。」

今、あたし、どんな顔してるかな・・・？

「つまんないって、准いるでしょ？まだ喋ったことない？」

准くんか・・・

「いるよ。喋ったこともあるし、今朝も一緒に来たし。」

でもね・・・ダメなの・・・

「じゃあなんで？」

迷惑、かけたくないの。

「じゃあ、領くんに会いたかった。」

「じゃあって…。まあ、喋りたくないなら無理しなくてもいいけど…。」

今の顔を、見られなくなかった。
きつと、ヒドい顔をしてる。

まだ癒えない傷…。過去が、あたしを縛ってる…。

「領くんさ、夢って、ある？」

何気なく問いかけた質問でも、一生懸命に考えてくれる。」

「夢…はね…。みんなと、仲良く暮らせることかな。」

「みんな？」

「そう、みんな。別に、同じ家に住むってわけじゃないよ？ 仲良く集まって、くだらないことで笑って、バカやって…。心から楽しいって思えるような、そんな世界がいい。」

「ステキ…。」

「そう？ 誰に言っても、バカにされるけど。」

「そんなことないよ。すっごくいいと思う。」

「ありがと、真菜ちゃんの夢は？」

「そうだよ、順番的にあたしだよ。でも…。」

「あたしの夢…。ないんだ…。」

「変だよ、あたし。頷くんもそう思ったはず。」

「誰かが言ってたの。今を生きなきゃ、未来は訪れないって。でもね、あたし、未来で生きてる自信ないの。今をどう生きていいか分からなくて。」

「だから、夢とか、大きなことが言えなくて…。どうしていいか…。」

「溢れ出す涙。とまらない。」

「ごめんね、とまんないよ…。」

「いーんだよ。そのまま泣いて。弱いことが負けじゃない。何回負

けてもいいんだよ。また立ち上がればいいし。そのたびに強くなれるしね。それに、泣きたいときに泣かないと、泣き方忘れちゃうからね。」

本当に、心からの言葉。あたしの中の氷のかたまりを、1つ1つ優しく溶かしていく。

——体を感じる体温がある。

それが領くんの体温だと分かるまでに、数秒かった。

泣き止むまでに、どれくらいかったのだろうか。
でも、隣に感じる体温は、ずっと優しく暖かった。

「もう大丈夫。ありがとう。」

笑えてたかな？分からないけど、気持ちを伝えたかった。

「たくさん泣いたね。じゃあまた明日から頑張ろ！！俺は、なにがあっても、真菜ちゃんの味方だからね。」

本当に、ただ1つ。笑顔が素敵で。どんな人でも一緒に笑えて、楽しそうで。

「今日は、授業サボっちゃお、ね！たまには必要だよ。こ・いう日も。」

放課後、日が暮れるまで、他愛もない話をしていた。

「そろそろ帰ろっか。」

あたしがそういうと、「家どこ？送るよ。」って。
でも「んーん。いいよ。」断った。

「そう？じゃあ、また明日ね。バイバーイ！！」

また笑顔で去っていった。

また明日、か…。

明日を信じられる。

そんな日は、二度と来ないと思ってた。

あの頃の輝きを、少しずつ取り戻している気がした。

新しい何かを

人を信じる強さに気付いたから。

昨日とは比べ物にならないくらい、何もかもが輝いていて。でも、ただ1つ。気になることがあって。

今日は、しっかり授業に出てみた。後ろは准くんだから平気だし。けど、准くん以外の視線を感じる。朝から、ずっと、ずっと。

昼休みになって、またイジメが起こる、そう思ってたとき。

「相崎さん？」

気になる視線に声をかけられた。

「何、ですか？」

いつもならシカト。でも、朝からだから少しだけ。

「ちょっと、いいかな？」

呼ばれたから、ついていく。ただ、それだけ。

「真菜ちゃん...。」

准くんが、不安そうな顔であたしを見ている。だから、准くんの耳元で、

「大丈夫だよ。多分。」

言ってみたものの、どこへ行くか分からない。何が起るのかも分からなかった。

同階の非常階段。この人にもイジメられんのかなあ、って。

「あのさあ、、、。大丈夫？その、イジメ・・・？」

出てきた言葉は、予想してなかった。

「はあ...。」

「ウチでよければ、相談乗るよ？よかつたら、何でも言って？」

何だ？この人。突然、あたし中に入ってくる。

「ウチ、望月愛衣。よろしくね。」

どうしようか...。望月愛衣。

そんなことをぼんやり考えていると、チャイムが鳴った。
休み時間終了の合図だ。まあ、またあとでみんなに相談すればいいか。

——でも、そんな時間すらなかった。

授業が終わって、淮くんと喋ろうとしたら、また来た。

「真菜！！」

真、真菜...？

「真菜、一緒に帰ろ？」

なんなんだ。訳分かんない…。

「真菜ちゃん…。」

准くんが、異変を察したのか、こちらを見ている。

「あ、宮川くん、真菜に用事あるの？」

声をかけられたときの准くんの目。優しくない。1番最初に会った時と同じ目をしてる。

「別に。」

声も、冷たい。

「じゃあ、行こ、真菜。」

「う、うん…。」

「じゃあね、宮川くん。」

准くんの態度に驚きつつも、彼女に手を引かれて教室を出るしかなかった。

「ねえ、真菜。」

いつから、名前で呼ばれる仲になったのか。

「なんですか？」

「敬語とかナイわあ。いいよ、タメで、あと愛衣で。」

「はいい…。」

どうしたらいいんだろう…。世間的に今ドキな子は苦手で。望月愛衣は、まさに苦手タイプの模範だ。

「ねえ、ケ・番とメアド教えて？」

「えっ…。」

「ダメ？いいじゃん。ウチら友達でしょ？」

彼女の友達基準はなんだ。一回喋れば誰でも友達なの？
“友達”この響きに違和感を覚えて。

「うん…、分かった。」

それでも、結局断れなかった。

「ありがとお、じゃあ、ここで。ウチ、ここなんだ。」

指差したのは、目の前のマンション。

「あつ、あがつてく？」

「ううん、いいよ。」

「そう？じゃあ、また明日。学校でね！！」

家に帰ってケータイを開くと、知らない番号から電話が来ていた。そして、知らないアドレスからメールが来ていた。

“宮川准です。アドレスと番号、羅希から聞いた。これ読んだら、電話ちょうだい。”

宮川准。これを見た瞬間、少し安心した。メールを閉じて、すぐに電話をかける。

「もしもし？」

「あ、真菜ちゃん？」

「うん…、どうしたの？」

「望月のことなんだけどもさあ…。」

電話でも、困った顔が浮かんでくる。

「気をつけてね。別に、無理して喋ること無いと思うから。まあ、こんなこと、

オレが言えたことじゃないけど。」

「うん、今のところは大丈夫だよ。心配してくれてありがとう。」
「そう？よかった。何かあったら、いつでも言って？オレ、真菜ちゃんの味方だから。」

「ありがとう。ねえ、准くん。」

「ん？」

「真菜でいいよ。」

「呼び捨て…、いいの？」

「うん。」

心を許せる人はなかなかいないけど、いたら、とことん許すことにしてる。

「じゃあ、真菜。また明日ね。」

「うん、またね。」

明るく振舞っていた。でも、これから何が起こるかだけは、予想も
つかなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968g/>

虹の彼方へ

2010年12月30日14時16分発行